

図36-40 G. plecoglossi の人為感染実験 (II)。

- 図36 0.85%食塩液に懸濁させた胞子の皮下接種後8日目の皮下脂肪層に認められた初期のキセノマ。ブアン氏液固定。ヘマトキシリン・エオシン染色。スケールは20 $\mu$ 。
- 図37 同じく23日目の疎性結合組織内のキセノマ。すでに宿主反応があらわれ被包化がはじまっており、また、“シスト”内ではスポロゴニーが始まっている。ブアン氏液固定。ヘマトキシリン・エオシン染色。スケールは40 $\mu$ 。
- 図38 蒸留水に懸濁された胞子は腹腔内に種種した魚。体表に外観的に点状に認められる“シスト”(矢印)が形成されている。
- 図39 胞子の腹腔内接種により脾臓に多くの“シスト”が形成された例。体表にも“シスト”による隆起が認められる(矢印)。
- 図40 図23に示した魚の“シスト”形成部位の組織像(ブアン氏液固定,ヘマトキシリン・エオシン染色)。“シスト”は皮下脂肪層に形成されている。

☒ 36-40

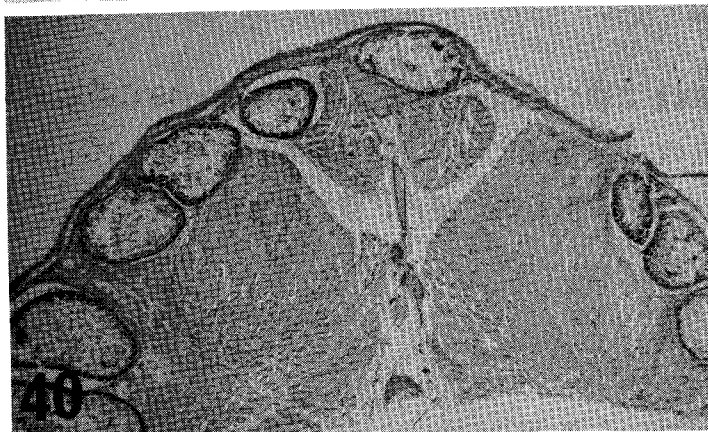
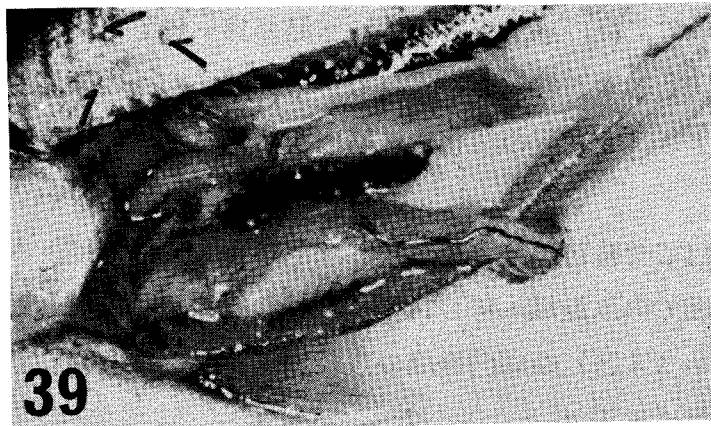
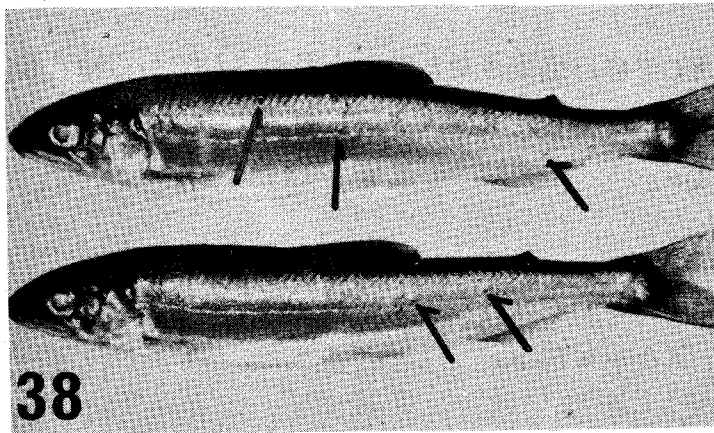
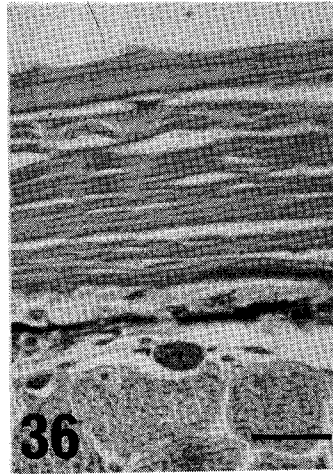


図42-47 G. plecoglossiを人為感染させたアユを2系列の水温で飼育した時のキセノマの発育。ブアン氏液固定。ヘマトキシリン・エオシン染色。

図42 18.4℃で経口感染させた後、水温が18-19℃の地下水で19日間飼育したアユ（1区）の腹腔内に形成された初期の“グルゲアシスト”。スケール50μ。

図43 12.8℃で経口感染させた後、水温が12.8℃から徐々に15℃まで上昇した湖水で19日間飼育したアユ（6区）の消化管壁に見いだされたキセノマ。スケール20μ。

図44 図43と同じ処置をしたアユの34日後の幽門垂の筋肉層に見いだされたキセノマ。スケール50μ。

図45 18.4℃で経口感染させた後、水温が18-19℃の地下水で4日間飼育した後、14.0℃の水温域へ移し、14℃から17℃に徐々に上昇した湖水で30日間飼育したアユ（5区）の消化管の筋肉層に見いだされたキセノマ。スケール50μ。

図46 18.4℃で経口感染させた後、水温が18-19℃の地下水で9日間飼育した後、14.6℃の水温域へ移し14℃から17℃へ徐々に上昇した湖水で25日間飼育したアユ（4区）の幽門垂間の腹腔内に見いだされた初期の“グルゲアシスト”スケール50μ。

図47 18.4℃で経口感染させた後、水温が18-19℃の地下水で19日間飼育した後、15.4℃の水温域に移し、15℃から17℃に徐々に上昇した湖水で15日間飼育したアユ（2区）の臓内に見いだされた成長した“グルゲアシスト”。スケール50μ。

☒ 42-47

